

コントラバス【英：contrabass／独：Kontrabaß／伊：contrabasso／仏：contrebasse】

..... **楽器データ**

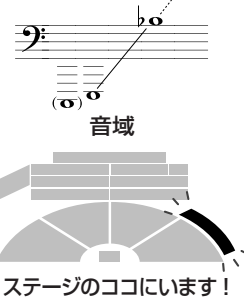
サイズ：全長約 205cm (団員の楽器の実測値)

コントラバスの名曲：サン＝サーンス《動物の謝肉祭》マーラー・交響曲第1番、ディッターズドルフ・コントラバス協奏曲など

コントラバスを愛した作曲家：(—というのは特にいないがブラームスは弾きやすい。そのワケは……以下の本編をお読みください)

コントラバス弾き有名人：ゲイリー・カー、いかりや長介、犬塚弘 (クレージーキャッツ) など

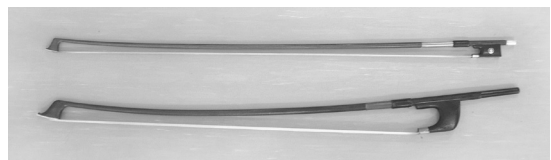
.....



今日のステージにある楽器で、いちば〜ん大きい、低い音を出す楽器——それは間違いなくコントラバスでしょう。なんとといっても大人の身長より背が高く、人の耳が音程を認識できる限界近くの低い音まで出せるというのですから。今回はそのコントラバスの秘密に迫ります。

この大きな楽器、同じ弦楽器のヴァイオリンやチェロの仲間かと思ったら、ちょっと違うんだそうです。右ページの写真をよく見て欲しいのですが、形が微妙に違います。わかりやすいところでは、**指板**と呼ばれる指で弦を押さえる黒い棹の部分と、本体の境目のところが、正面から見ると、コントラバスは**流線型**になめらかになっている(「なで肩」と言われる)のに対して、ヴァイオリンなどは直角につながっています。これは楽器のルーツが違うから。コントラバスは、バロックの時代まではよく使われていた、ヴィオラ・ダ・ガンバという楽器が進化してできたのです。

進化の経緯はいろいろあるようですが、わかりやすいところでは弦の本数の変遷があげられます。もともとは6弦や7弦であったものが、19世紀にはなんと3弦に減ってしまったそうです。このほうが響きがいいらしいのですが、音域の問題などからその後4弦が一般的になり定着しました。団員の使っている楽器でも、初めは3弦の楽器として制作され、のちに4弦に改造した跡の残っている古い楽器もあります。



コントラバスの弓(下)は太くてしっかり(上はヴァイオリン用)

楽器は今でも進化中で、より低い音を出すために5弦の楽器も使われます。楽器の長さも、ものによって20センチも差があったりするので。これで同じ楽器なんですから、なんだか不思議ですね。他の楽器ではありえません。

楽器が大きいので、弾くにも知られざる苦勞がたくさんあります。たとえば「ラ・シ」という音階では隣の音なのに、弦を押さえる位置が14センチも離れていることがあるのです。こうなると、瞬時にピッタリの場所を押さえるにはかなりの繊細さが要求されます。楽器の長さの**アバウト**さとはあべこべです。でも、繊細だけでもいけません。弦が太いので、左手の押さえる指はかなりの力が必要です。この楽器を長くやっている人には、右利きなのに握力は左のほうが強いという人もいるくらいです。もちろん、弓を持っている右手の負担も相当なもの。そのためコントラバスの弓は、ヴァイオリンのものなどと比べると、太く、短くつくられています。ヴァイオリンの弓でコントラバスを弾いたら、弓が折れちゃうほどなんですって。学生オケなどでは右腕の鍛練にビール瓶に砂を入れたものを使ったりしたというんですから、ほとんど体育会系のノリです。でも実際、一生懸命弾けば運動量も相当多いし、音をよく聞こうと耳を傾ければ、首がまがり、体がねじれ、腰を悪くする人も多いそうです。ほとんど体力勝負の世界ですね。

コントラバスは他の弦楽器とはちがいで、さまざまなジャンルの音楽で使われているのも特長です。オーケストラのほかにも、吹奏楽、ジャズ、タンゴ、マンドリンオーケストラなど、あらゆるジャンルの音楽のなかで音の土台を支える役割をはたしています。この楽器のもつ豊かな低音の響

きが、多くの人たちを魅了してきたからでしょう。

それではここで、埼玉フィルのコントラバス奏者たちに話を聞いてみましょう。まずはこの楽器を選んだきっかけは？

「クラシック音楽が好きだったんだけど、ヴァイオリンなんかだと子どもの頃から弾いてる人にはかなわないでしょう。コントラバスなら入りやすいと思ったので……」

「高校で弦楽合奏の授業があって、背が高かったのでコントラバスをやりました。大学ではオーケストラに入り、最初はトランペットだったんです。でも2年になってうまい後輩が入ってきたのでコントラバスに移りました」

「吹奏楽でトランペットを吹いていたんですが、見ていてコントラバスがカッコイイ！と思ったからですね」

——コントラバスのどんなところが楽しいですか。「やる気さえあれば、ジャズとかいろんな音楽に飛び込めるのはいいね」

「ハーモニーのいちばん下(の音)を支えているのは、気分がいいですよ。たとえばいたずらで、チューニングのときに、わざとちょっと音を高めに合わせてちゃう。そうすると、ほかの楽器にその高い音程が波及して、みんなの音が高くなっていくんです。人数の少ないアンサンブルなんかではてきめんです。『オレが支配しているんだ』と思えて気持ちいいですよ。そういうのにハマるとやめられないね」

「より気分がいいのは、ガタガタ細かい音符を弾いているときよりも、のばしの音などの通奏低音のときです」

「指で弦を弾く奏法の響きもとても好きですよ」
「単独で目立つところは少ないですが、《運命》でも2楽章で、ココは弾くぞ！ってところがあって、そういう音に生き甲斐を感じてる人もいます」

「ブラームスの曲は弾きやすく楽しいんですが、これにはある噂が……。ブラームスの父親がコントラバス弾きだったのですが、いわゆるへタだったらしいんですよ。音程なんかちゃんと取れ



《運命》2楽章冒頭。矢印の音に生き甲斐！

ない。おかげでブラームスはコントラバスを難しい楽器だと思い込んでいて、やさしい譜面ばかり書いたんだとか」

——そんな話があるんですか。でも大きい楽器、苦勞もいろいろあるでしょう。

「やっぱり楽器を運ぶのは大変。どうしても車になるので、本番のあとにも家に帰ると、あらためて打ち上げに出てくるのもしんどくなっちゃう。弾くのも体力を使うし。打ち上げに出ているときは疲れてないときなので、手を抜いてる本番だったりしてね」(笑)

「練習も車で行かなきゃいけないので、飲みに行ったりのコミュニケーションもなかなかとれないのは悲しいところです」

「ソロなんか出てくると嫌ですね。マーラー(交響曲第1番)のときは、音も高いし楽章の最初からでしょう。(ソロのある)3楽章が済んだらひと仕事終わった気分でしたよ」

「大きいせいか楽器扱いされないことがある。たまに練習場などで、楽器をまたいで通る人がいるんですよ。まったく材木が置いてあるわけじゃないんだから」
——それはヒドい！ では最後に、コントラバスってどんな楽器だと思いますか？

「“古女房”みたい。あまりゴリゴリ言うとうるさくて仕方ないけど、いなければ不便という困るという……」

——ははは。確かにオケのなかでは普段は目立たないけれど、ないと音が貧弱になって困る楽器ですものね。今日の《運命》では、チェロと一緒に細かいフレーズなど、目立つところもたくさんあります。普段はなかなか目や耳がいくことのない楽器かもしれませんが、今日のステージではちょっと注目してみてください！

* * *

毎回、演奏会のプログラムで、オーケストラで使用される楽器をひとつずつ紹介しています。次回もお楽しみに！